●春日部市民文化講座（第 43 回）　「戦国時代に茶の湯は生まれた ー千利休がわび茶に求めたもの」

◆日時：2024 年 2 月 14 日(水)　10 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■戦国時代に茶の湯は生まれた ー千利休がわび茶に求めたもの

◆千利休が「わび茶」に求めていたものを考える

きょうは皆さんの目の前に参考品を持ってきました。これは皆さんに後で手に取っていただき、ここから感じ取っていただきたいのでいろいろと持ってまいりました。これらの器が何を語っているのか、特に千利休は茶碗を通して何を感じ取っていたのか、自分が切腹を命じられても、自分の命よりもなお価値のあるものとして感じ取っていた「侘び」というものについて皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

◆千利休が構築し完成させた「茶の湯」

千利休は、まさに戦国時代ですよ。裏切り裏切られ、自分の愛する家来たちが殺され、家族を失い、婦人たちは未亡人になり、父無し子が増えていく時代のまっただ中で、利休さんはぼくたちが好きな「茶の湯」を構築し完成させたのですね。ただ、完成させたのは、利休さん一人だったとぼくは思っていません。利休さんの周りにはたくさんのブレインがいましたからね。そういう人たちとともに「茶の湯」を構築したのです。

外国に行くとよく聞かれるが、「侘びって何ですか」「寂びって何ですか」「日本文化って何ですか」ってね。そんな時に、ぼくは間違うことなく「茶の湯です」と答えます。

◆千利休は「温（ぬくもり）」を求めていた

「茶の湯」というのは人が生き死にする、そのただ中で誕生した文化といってもいいでしょう。千利休は「茶の湯」を構築し完成させ、それが 400 年以上の今日まで続いてきたのです。その利休さんが自分の弱さを知り、本当に求めたものは「温（ぬくもり）」「人肌」だと思います。利休さんだけでなく、人は皆「温」を求めているのです。

ぼくは 16 歳で洗礼を受けて聖書を読むようになって知った最初の凄いことは、アダムとエバ、男と女がいて、お互いが「温」を知り、やがて子どもが生まれたという事実でした。だから「温」の原点はアダムとエバなのですよ。

◆分かち合う知恵

きょうのお話は千利休は何故「温」を求めて、それを文化にまで高め、見える形に創り上げていったのだろうかということですね。利休さんは日頃から「いったい自分は何なのだろうか」って考えていたのだと思います。そして、本当に「死」を考えたときに、誰か最後に自分の手を握ってくれる人がいるのかなって考えたと思うのですよ。そういうことを日頃から自分の哲学としていたからこそ、秀吉から「お前なんか死んじまえ」と言われたり、切腹を命じられたりしても動じることなく、誰にも助命を懇願することなく、工作も何もしないで切腹していったのですね。

そうした中で、ぼくが感動するのは、切腹する前に一服点てて使い終わった道具を、これは誰に差し上げて、これは誰誰に渡して欲しいと言って差し上げているのですね。だから、皆さんの死の備えとして、今から自分の大切なものをどうするかを考えていて欲しいのですね。ぼくは既に考えています。このお茶碗はどうしようか、あの道具はどうしようかとね。自分の意志として死ぬことの意味を受け止めて、共に分かち合うことは大切な知恵だと思います。

◆茶事の様相／茶事七式

戦国時代に茶の湯は生まれた
—千利休が侘茶に求めたもの

序　〔髙橋先生のレジュメより〕

1. 千利休は「温（ぬくもり）」を求めていた
2. 人はだれもが「温」を求めている
3. アダムとエバは「温」の原点
4. 茶の湯の定義
   茶の湯とは、畳を敷き詰めたご座敷に人々が集まり、さらに用意された釜以下の道具を使い、茶をたて、客の前でもてなすことである。

Ⅰ．千利休が侘茶を確立する前の茶

1. 仏教は薬として茶の湯を中国から輸入した
2. 貴族の快楽を求めての茶
   1) 闘茶
   2) 会所の茶
   3) 茶の湯の広がり
3. 浄土宗の茶の湯と堺の豪商の数寄屋

Ⅱ．美濃茶碗と長次郎の出現

1. 侘茶の流れ
   1) 珠光(村田？)1423～1502(応永 30～文亀 2)年
      珠光のことば
      「月も雲間のなきことはいやにて候」
      「藁屋に名馬繋ぎタルがヨシ」
      小茄子茶入所持
      山上宗二
   2) 武野紹鴎
2. 利休所持 —— 瀬戸黒
   「小原木」の存在の意味
3. キリシタンの茶の湯の理解は消え去り、禅宗の解釈で茶の湯が語られるようになる。

Ⅲ．長次郎茶碗の赤と黒と小原木

1. 唐ものから伊万里焼への変遷
2. 長次郎と利休の合作の茶碗
3. 楽茶碗が語り掛けているものは何か
4. 小原木と黒と赤茶碗を鑑賞する

結論　江戸の平和と太平洋戦争前後の侘茶

1. 「温(ぬくもり)」の茶碗
   ヘブロン出土 紀元前 2000 年 銘「温」
2. 15 代 樂吉左衛門の赤
3. 寛永文化の花と咲く侘茶
4. いつわりの「温」の蔓延に侘茶が答えるもの

2024 年 2 月 14 日

第 43 回　「戦国時代に茶の湯は生まれた ー千利休がわび茶に求めたもの」

◆茶の湯の定義

レジュメに「茶の湯の定義」と書きましたが、「茶の湯とは、畳を敷き詰めたご座敷に人々が集まり、さらに用意された釜以下の道具を使い、茶をたて、客の前でもてなすことである」。つまり、湯を沸かして茶を点てて、お客様にどうぞとお勧めするというのが定義です。お湯を沸かして茶を点てて、独りで自分をもてなすのも、とても大切な「茶の湯」だと思います。それと言うのも、ぼくが 16 歳から聖書を読んでお祈りを続けてきたことと同じだと思います。だから、「茶の湯」は修行なんですね。修行する厳しさを自分自身に課せなかったら、人間はどんどんだらしなくなりますね。つまらない人間になって、つまらない人間になった時に人を見下すようになるのですね。自分がくだらないからですね。自分が見えなくなると人を見下すようになるのです。どうしようもないですよね。

◆千利休が侘茶を確立する前の茶

千利休は茶人として有名ですが、商人として生計を立てていました。そんな利休が茶の湯を知ったのは、やはり寺院だったと思います。もともと茶の湯は僧侶を通じて中国から入って来て、寺院で薬として飲まれました。初期の頃には、これは万能薬だと書かれている本もあります。千利休は茶の効用を誰よりも良く知っていたのだと思います。

室町時代には貴族も茶を楽しんでおり、彼らは富と時間を持て余していて、「闘茶」といって賭け事に「茶の湯」を使っていました。このお茶は何処で採れたお茶かということを当てる賭け事をしていたのです。さらに、商人がお金を持つようになると、自分たちで自分好みの茶室を造ったり、おもてなしをするようになり、貴族たちは会所みたいな所でサロン的な雰囲気で、お茶を楽しんだのです。千利休の前の時代には、そういうお茶を中心とした交流が盛大に行われていました。また、禅宗とは異なる浄土宗という仏教が出てきて、人々を集めるために「茶の湯」を使ったのですね。単なる薬としてではなく、茶の香り、味わい、温もりというものを布教に使っていったのですね。

そういうことがあって、室町時代の末期には、堺の商人たちの間では凄いブームになっていました。堺市の文化財研究において発掘されたものを見ていくと、生半可な茶の湯ではなかったのです。そこにたまたま応仁の乱や疫病の流行、飢饉などを避けて、京都から疎開してきた武野紹鴎が堺にやってくるのです。堺で「茶の湯」を学んでいた千利休は、その武野紹鴎に弟子入りしたのです。

◆侘茶の流れ

一般的に「侘茶」は村田珠光（1422?-1502）に始まり、武野紹鷗（1502-1555）に継がれて千利休（1522-1591）が完成すると言われていますが、この 3 人の間には 100 年以上の時があるのです。でも、ぼくが調べた結果で実際には途中が不明です。この珠光の有名な言葉としては「月も雲間のなきことはいやにて候」で、これが侘びだというのですよ。あるいは「藁屋に名馬繋ぎタルがヨシ」です。あばら家に名馬が繋がれている風情がいいじゃないですか…という心境、皆さんは分かりますか？　これが「侘び」だというのですよ。

◆利休所持 —— 瀬戸黒

さて、これからが面白くなりますよ。ここに瀬戸黒があります。この瀬戸黒は表千家が所持していて、国の重要文化財になっている「小原木」の写しです。では、誰が写したかというと、樂家 10 代の旦入（たんにゅう、1795-1854）です。10 代の茶碗の温もりを感じられるますので、後でゆっくりと手に取ってみてください。千利休が瀬戸黒の茶碗を所持していて、それに「小原木」という銘を付けました。それが現在、重要文化財になっています。そして長次郎から続く樂家 10 代の旦入が、これを写しました。それを即中斎宗匠（表千家 13 代家元無盡宗左、1901-1979）が「旦入作」と極めてくれています。

この「小原木」が生まれた頃に、志野とか伊万里焼とかもあり、既にさまざまな茶碗が誕生していました。千利休がこの瀬戸黒を使った時代に、瀬戸黒は「今焼き」と呼ばれており、後に長次郎が作った茶碗も「今焼き」でした。

不思議なことに、志野や瀬戸黒、伊万里焼などの茶碗が焼かれるようになったのは、どこから来たのかというのは謎なのです。ただ、秀吉が朝鮮に大軍を出兵した文禄・慶長の役（1592-3、1597-8 年）で連れてこられた優秀な陶工により伝えられたもので、九州近郊の焼き物をはじめ志野も瀬戸黒も、そうした人たちによってできたというのが、ぼくが調べた結論です。ただし残念ながら、その証拠はありません。手がかりとなるのは、窯跡に残された陶片などの残骸で、そういったものを地道に研究された加藤唐九郎さん（1897-1985）などが積み上げられた世界が「志野焼」になるのですね。瀬戸とか多治見には、もともと陶工がいたのかもしれませんが、朝鮮からの陶工たちがやってきて、日本の土を使って、日本人が好むような作品を新たな技法で焼かれて「志野焼」や「瀬戸黒」が完成していっただろうと思います。そして、その頃には茶の湯も盛大になっていたので、それにふさわしい茶碗などが焼かれたのだと思います。

◆「温（ぬくもり）」の茶碗

ここに並べてある茶碗の中に、実は紀元前 2000 年、今から 4000 年前の茶碗を置きました。ですから、縄文土器よりも古いかもしれません。ぼくは縄文時代のことが好きで、その時代の研究をされていらっしゃる方々ともお話しているのですが、これは聖書に出てくるアブラハム（ノアの洪水後、神による人類救済の出発点として選ばれ祝福された最初の預言者）と同じ時代の土器ではないかと言われているのです。これは、ヘブロン（エルサレムの南に位置するユダヤ教・キリスト教・イスラム教の聖地の一つ。パレスチナ自治区内）というところで見つかって、それを見つけた方が「これは抹茶茶碗じゃないか」と言って、わざわざ春日部のぼくの処まで届けてくれたのです。

これは茶碗として使えそうだけれども高台が無いのです。これを何とか茶碗として使いたいと思って、漆芸家で人間国宝の増村紀一郎先生に持って行って「これに漆を掛けて使えるようにしてください」とお願いしたら、塩抜きするのに何と 1 年もかかりました。塩が抜けなければ漆が掛けられないのです。1 年かけてできました。そこで、増村先生に「これに銘を付けてください」ってお願いしたら、今日のテーマである凄い名前を付けてくれました。銘は「温（ぬくもり）」です。これは嬉しかったですね。これでお茶を飲むと、お湯の温もりが手に伝わってきて、静かに飲み終わるまで「温もり」を感じられる茶碗です。お茶碗の温もりというのは、だんだんと冷めていく中で、おれは人間なんだ、おれは死に行くものなんだというとこを語ってくれるのです。それをこの器から感じてください。

◆細川護熙さんの茶碗「如何と云う」

ぼくは、高山右近の「日本訣別の書状」が永青文庫で見つかった後に、細川護熙さんと出会って、あぁ、この人は損得で生きていない人だなぁ…ということがよく分かりました。彼はなりたかったのでしょうが、総理大臣までなって、今は陶芸家ですよ。きょう、ここに持ってきたお茶碗には、彼が初期に焼いてくれたお茶碗もあります。皆さん、あとで手に取って彼の作品を味わってください。護熙さんという人は、表も裏も知っている人、清濁併せ呑める人なのです。だからとんでもない器の人なのですね。

高山右近が細川忠興に贈った「日本訣別の書状」の中に「俺の生き方をどう思う」と言って「如何」という言葉があるので、護熙さんからお茶碗をいただいて、ぼくは「このお茶碗の銘を『『如何』にしてください」とお願いしました。すると、彼が感動してくれて「髙橋さん、『如何』だけでなく、『如何と云う』とぼくは付けたいんだけど」と言われて「如何と云う」という銘になりました。人生、如何に。あなたの人生、如何。細川護熙さんは、そういう哲学を真面目に考えられる人です。でも、あの人の興味の広さ、計り知れない分野への興味は訳が分かりません。

◆長次郎茶碗の赤と黒

千利休が長次郎と出会って、長次郎に「楽」と言われる茶碗を焼かせる前に「志野」や「瀬戸黒」がありましたということを、きょうは言いたかったのです。このように言うのは、実はこの点についての記録がないのですよ。突然のように素晴らしい「志野」が出てきて、「瀬戸黒」が出てくるのですよ。

そういう中で、千利休は長次郎に「赤」の茶碗をまず焼かせるのです。赤の茶碗には土の色が出ています。長次郎の「赤」は、この瀬戸黒のように底の部分には釉薬を掛けずに土の色が見えるように作られています。続いて長次郎に作らせた「黒」になると、全体に釉薬が掛かるようになります。そうなると、土の色が分からなくなるのですね。

今、ここに並べてあるのは、ぼくが「温もり」を感じる茶碗たちなのです。最初が「土器」です。次が「瀬戸黒」で、そして「赤」が三番目で、最後が「黒」という順番になります。これらは手に取った瞬間にお湯の「温もり」が伝わってくるのですね。だから、自分でお茶を点てて自服でいただく時も、どなたかのためにお茶を点てておもてなしする時も、いつも「温もり」が届くような「茶の湯」の修道をしたいなと思う訳ですね。

◆志野焼のルーツ

一般的には、志野焼こそ日本人の心で多治見で生まれた焼き物であると、ぼくも本などで学び先輩たちからも習ってきました。でも、多治見で突然として志野焼が生まれるのですね。ぼくが思ったのは、その文化は朝鮮半島の人たちが唐津に渡って来て、そこがいっぱいになって他の陶土のある地域に流れていったと思うのです。大量に陶工たちがやってきて全国に流れたことは証明できるのですね。そういう人たちが瀬戸に移り、多治見に移って、多治見に土着した朝鮮の陶工たちの技術が日本人に伝わり、それで志野焼が生まれたのではないかというのが、ぼくが納得するストーリーなのです。何故なら、千利休が「小原木」という銘の瀬戸黒を所持し愛用していたのか。さらに、千利休が長次郎と出会って楽を焼かせた時代考証を証明することができないのですけれども、ぼくは瀬戸黒が先にあって、長次郎の楽の誕生の方が後だと思っているのですよ。つまり、志野焼や瀬戸黒の方が先に多治見で焼かれていて、その後に、長次郎の楽焼が生まれてきたのだと思います。千利休は瀬戸黒は持っていましたが、志野焼の茶碗は所持していませんでしたね。でも、志野には惹かれますよね。それは何故かというと、朝鮮の素晴らしい技術

が多治見に届いて、多治見でほんの一瞬だけ焼かれて、その後はあの素晴らしい技術が無くなってしまうのですね。そして、ずうっと知られていなかったのです。加藤唐九郎さんが「これが素晴らしい」と言って、志野焼や瀬戸黒の素晴らしさを話すまでは世の中から消えていたのですね。

◆教会に茶室がある理由

教会に何故茶室があるのかということをお話したいと思います。それは、これまでの日本文化に対するチャレンジなのです。キリスト教の神学が茶の湯の中に確かに入っているということを、ぼくはさまざまな古文書を通して学んだのですね。でも証明はできません。そして、千利休の「侘茶」にキリスト教の影響はあったんだということを、茶の湯を習い始めた頃から感じていたのですね。

聖書の中に「山上の説教」というのがあって、イエス様の言葉が『マタイによる福音書』の 4 章以降に書かれているのですが、千利休が言う「侘茶」の世界のようなものが既に述べられているのです。例えば、千利休は茶花について「花は野にあるように生けよ」と言っているのですが、聖書でも「野にある如く」と書いてあるのです。ですから、既にイエス様がおっしゃっていることを、千利休は言っているのです。また、千利休は茶室に入る前の露地に飛び石を置いてわざと歩きにくくしているのですね。それまではあんな石は無かったのです。さらに、躙り口のように狭い入り口を何故作ったのかというと、「狭い門から入りなさい」というイエス様の言葉なのです。命の道はここからしか入れませんよ、狭い細い道なのです。もう、ピッタリではありませんか。

このように千利休の世界は、イエス様がおっしゃっているのですね。ぼくは 16 歳から聖書を読み始めて、「だよなぁ！」だと思っていたのですが、こうして皆さんとお話すればするほど、現代の茶の湯の世界が聖書の世界から外れていると思うようになったのです。特に三千家をはじめ、多くの茶人がその世界を忘れている、完全に無視しているかの如くに忘れていることは、とても寂しいことだなぁと思ったのです。そこで、禅語ではなく、キリスト者の言葉で茶の湯の世界を語ろうというのが、教会に茶室がある理由なのです。

◆自分を客観視することの大切さ

何で高山右近がキリストのために家康によって国外追放されても信仰を捨てなかったのか、しかも茶の湯さえも捨てていないのです。だから、彼が細川忠興に宛てた最後の手紙『日本訣別の書』の中では、茶の湯の言葉、茶の湯の思想で終わっている訳ですよね。それが「如何」なのです。「おれがこうしてキリストのために全部捨てて追放されるのを君はどう思う」と問うているのです。問えるだけの確信がある人なのですね。だから、自分の生き死にについて、ある意味で客観視しているのですね。だから、自分にどんなことが起こっても、茶人は客観視する修道が大切ですね。客観視するっていうのは、まず水を汲んでお湯を沸かし、お茶を仕入れておもてなしの用意をすること、誰を呼ぼうかなって考えて、あの人だと決めたら呼んでお茶を点てて「お粗末でした」と言えるのが「侘茶」なのです。

◆「茶の湯」とはおもてなしの修道

戦国時代、戦争の真っただ中にあって「温（ぬくもり）」を求めていた千利休が、二畳の「待庵」という茶室を造り、人肌を感じる長次郎の茶碗（聚楽第ができてから「楽」と呼ばれる茶碗）を作りあげた。ここにこそ、ぼくたちが本当に求めているもの、心の渇きを癒すものがここにあるのだと思います。だから「茶の湯」とは習い事ではなくて、利休さんが言ったように「茶の湯とはただ湯をわかし茶をたててのむばかりなる事と知るべし」なのですね。こうした「おもてなし」の修道なのです。それを自分自身にもすること、これはとても大切なことなのです。自分自身をもてなすというのが最も忘れがちなのですね。それというのも、人のことは見えても自分自身のことは見えないものなのですね。

ぼくの修道は自分自身をもてなすこと、自分自身を大切にすることです。その時に、今まで見えなかったものが見えてくるのですね。イエス様は「自分がしてもらいたいと思うことを、人にしなさい」と仰っています。それが愛ですよ。凄いでしょう。これって「侘茶の神髄」ですよ。「自分がして欲しいことを、あなたの隣人にしなさい。それが愛ですよ」って、「侘茶」って愛そのものの表現方法なのですよ。「茶の湯」はその修道なのです。

自分の人生を客観視するということは、凄い知恵ですね。利休さんという人は、それができた凄い人だと思います。だからこそ、切腹する前にお茶を点てて、これは誰に渡してね、これは誰誰に渡してねって言えたのです。客観視できないと、混乱と私的煩わしさに押しつぶされていくのでしょうね。

ぼくは、奥日光で心臓が止まりそうになって病院に運ばれた時に、最初にぼくを診てくれた医師が「髙橋さんは牧師さんだから言うけれど死ぬところだった」と言われたので、今、こういうことが言えるのですが、皆さんも必ず死ぬのですから、そのために「侘茶」の修道が大切なのです。死を考えたところに、別れを考えたところに、「温」を感じられなくなった中で、千利休はこれだという世界を見せてくれたのです。凄い人ですね。

髙橋先生からの**「人生を客観視する「茶の湯」はおもてなしの修道」**との言葉が心に残りました。